

---

# Asriel Monolog

ALFRED

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A s r i e l   M o n o l o g

### 【Nコード】

N 2 1 3 6 F

### 【作者名】

A L F R E D

### 【あらすじ】

この幻想世界に描かれる、アズリエルと呼ばれた少女たちの隠された物語。長編で描ききれなかった彼女たちの個性から、幻想世界の細部を、抜粋、短編の形で描いた物語。

## 【花売りの話】

### 【花売りの話】

お花一本、10です。お花いかがですかあ？

大きな町、綺麗な家々と、賑わう市場の最中  
小さな少女が、小さな花を売っている。

一本一本、それは綺麗で可愛い花々が、色とりどりに咲き誇っている。

「お花一本、いかがですか？」

通りすがりの、漆黒のエプロンドレスの女性に、女の子は訊ねます。

「……一本、貰おう」

眠そうな顔で、エプロンドレスの女性はお金を出しました。

「お花一本、いかがですか？」

通りすがりの、凜とした巫女服の女性に、女の子は訊ねます。

「……いない」

そう言つて、巫女服の女性は去っていきました。

「お花一本、いかがですか？」

通りすがりの、黒衣に身を包んだ少女に、女の子は訊ねます。

「……」

少女は何も言わずに、女の子の元を去りました。

「お花一本、いかがですか？」

通りすがりの、とある娘に、女の子は訊ねます。

「お前、何者だ？」

娘は、愉しそくに、笑みを零しました。

花売りも、楽しそくに笑います。

「私は、花売りです」

「幾ら貧しい身分や、少女と言う居姿であれ、花売りなどの世代でも流行らんよ。」

精々、小説で涙を頂戴する演出か、もしくは別の花を暗喩するか、だがその容姿なら後者でもあるまい」

まるで、気取った物言いのように、娘は女の子に問い詰めます。

「そう言う貴女も、こんな街中で、こんな少女に問答を広げるなんて、どうかしていませんか？」

「何、私は主人公だからな。主人公は素朴で平凡か、どこか破天荒なものなのだよ。そして私は、後者だ」

少女はあどけない笑顔のまま、

娘は無垢な笑みのまま、

「それでも私は、やっぱり単なる花売りです」

「そうか。ならば私は売れない小説家だな」

「でしょうね？ 小説家と言うよりは、皮肉屋ではないでしょうか」

「ふっふ、然り。その花、自分で育てたわけではあるまい」

「はい、そこら辺の草むらから、せっせと集めて、売っています」

「この街は広いし裕福だからな」

「はい、そこらじゅうの花壇から、簡単に集められます」

「君は、単なる不幸な少女ではない」

「はい、とっても不幸な少女だと思います。聞きますか？」

「いや、いいさ　話を聞いたら、同情して何かしてしまいそうだ」  
「そうですか」

少女はあどけない笑顔のまま  
娘は無垢な笑みのまま

「何を売っている？」

「花を売っています」

「いや、君としては、何を売っている？」

「……命、かも知れませんか。知っています？　花を買い人って、  
皆、暗い人ばかりなんですよね」

何かを恐れているんでしょうか？　不安なんでしょうか？　それとも怯えているんでしょうか？

私が、笑顔で花を差し出すと、まず驚くんです。

それから、少しだけ緩んだ笑顔で、花を買ってくれるんです。

さつき、お姉さんが買ってくれましたけど、あのくらいですね。

暗い顔ではなくて、何と言うか　世界を諦めたような、それともどうでもよくなってしまうたのか

「もしかしたら、夜の花売りさんと同じく、ある種の癒しを売っているのかもしれない」

「ほお、で　命とは？」

「夜の花売りさんは、自分の命を売っています。私は、花の命を摘んで売っていますから　たった10ぼっちで」

「そうか、良い話を聞かせてもらった。君も悪い小説家になれるよ」

「あは、ありがとうございます。お花、いりませんか？」

「ふむ、では全部貰おう」

娘さんは、重そうな札束をポンと出しました。

「お花一本、いかがですか？」

通りすがりの、巨漢の少年？ に、女の子は訊ねます。

「我は王である。そこな娘、我を知っていて、花を売るといふのか？」

「我が王よ、つつかちつちやい娘に絡むの止めやがれてっんだ！ わかつてんのかタダでさえロリコン王と愉快的仲間たちって揶揄され始めてんだからそこんとこわきまえて行動しやがれてっんだって国王陛下、口が過ぎました！ その構えはお止めください、ってマジメに止めやがれ、街中で何かまそうとしてやがんだ！ 自重しやがRGYUWAAAAA！！」

「こらこら、我が君　臣下の雑言にはその位で十分でしょう？  
あまり暴れては困ります」

「ふん、我が妃がそう言うなら、この程度で勘弁してやろうではないか。して娘、王にかようなちっぽけな花を売りつけようと言うのか？」

「はい、お花いかがですか？」

「ぬっはっはっはっは！ 気に入ったぞ小娘」 「だから自重しやがぬGyaba!？」

「では、可愛らしいお嬢さん、お花私たち全員分、売ってくださいませんかしら？」

その一団全員分の花を、少女は持っていました。でも、王は笑いながらお花を買って去っていききました。

- 
- 
- 
- 
- 
- 

「お花一本、いかがですか？」

通りすがりの、片腕の老剣士に、女の子は訊ねます。

「そうだな。娘さん、強く生きなさい」

老剣士は鋭い瞳のまま、大きなお札を一枚差し出して、一本の花を

買って去っていきました。

……

「お花一本、いかがですか？」

通りすがりの、白い鎧を纏った神殿騎士たちに、女の子は訊ねます。

「えっと 僕？」

「あは、隊長は食べちゃいたいくらい可愛いから……性的な意味で」

「おい、幼女の前で何を言う」

「マテ、なんでこの娘が幼女なんだ」

「シャットじゃねえよ」

「お前ら黙れ。すまん、その少女よ。我々は急いで」

「待つてよ、ローラント。そう焦る用事でもないじゃないか。そうだね……僕は一本、貰うよ」

「じゃあ、ワタシは百本頂戴」。セラとワタシでパールックすんの」

「じゃあ、幼女ちゃんにちなんだ千本」

「おい、犯罪者がいるぞ」「引き裂け」「切り裂き魔が居るぞ」「官憲呼べ、官憲」「お前ら、自分たちの身分わかってんのか」

「お前ら、全員黙って死ね」

ワイワイ騒がれながら、お花は全部売れてしまいました。

……

「お花一本、いかがですか？」

通りすがりの、自称小説家の女性に、女の子は訊ねます。

「花は売れているか？」

嬉しそうな顔で、自称小説家の女性はお金を出しました。

「変な人たちに、たくさん売れました」

笑って花売りの女の子は答えます。

「私も大金を払った筈なのだが？ ……なぜまだ花を売る？ そのお金で、何を買ったのだ？」

花売りの女の子は答えました。

「お花を売るために、お花を買いました」



## 【悲しい話】

### 【悲しい話】

私の前にその女が現れたのは、夕刻に染まる、茜色の空が差し掛かったときである。

黒い質素なエプロンドレスに、ぼやけた様な漆黒の瞳、濡れ場の様な漆黒の髪

今思えば、居姿からして不気味だったかもしれない、けどその子はとても寝ぼけた表情で、私を見据えていた。

磔にされている、私を

「……」

「何？」

「何をしているのかしら、と思ひまして」

「磔にされるのは大抵罪人よ」

茫漠とした意識の中、私はそう答えていた。何を思っただろう、誰を重ねたのだろう

そう 私は

私は、とある屋敷の使用人。

別に大きくも無い、小さな街の小さな豪邸人。

そこのお屋敷の使用

妹と二人で

「そう、貴女は……悪い人なのね」

「……そうよ、悪い人よね」

私が……罪人、か

「ウソね」

ッ？

何を

「顔を見ればわかるわ。

貴女、罪を犯したとは思ってないわね」

眠そうな顔で、退屈そうな顔で

私は礫の上から、

彼女は寝ぼけ眼で真下から

でも、深い瞳は 私を見下ろしている。

飲み込まれていく

「ねえ、何をしたの？」

まるで興味なさそうに、意味の無さそうに

その子は 妹に似た娘は、語りかけていた。

だが、私の話などよくある悲劇だ。

貧しい姉妹が居ました。両親は死んでしまいました。

姉は必死で働きました。

妹も姉に従いながら、一緒に生きていました。

働き先で、妹が妊娠しました。

妹は売女と罵られて、女將に殺されました。

死刑に処せられました

私は 復讐しました。

「結果 この様、か」

不意に、蓮つ葉な物言いに変わり、彼女の瞳が 相変わらず眠そうな瞳だ。

「そうよ。これ以上、私に関わらないほうがいいわ」

不意に、零れた透明な雫  
思わず、私から驚嘆が零れた。

漆黒の暗闇から零れた、一滴の涙

それは私ではなく、彼女から  
黒い少女からの涙だった。

「私は思う。家族を思う貴方は、間違っではない、と」  
「……はは、ありがとうね。でも、もう」

もう、妹もないもの

「ならば、私が勝手に暴れる」

と、ようやく私を見張っていた若い衆が、その闖入者に気づき、  
私は 見た。

漆黒の翼 翻った巨大な大鎌と、娘を覆う漆黒の衣服。  
嗚呼、私は気づいた。

単なる伝承に過ぎないと思っていたけど、そうか 彼女か。

アズリエル、生死を司る化物

私の町は、一夜にして滅んだ。

私の前にその女が現れたのは、朝日の差し込む、霞がかつた青空が覗いた頃。

白い質素な袴に、凜然とした蒼い瞳、濡れ場の様な漆黒の髪  
あの子に似ていた、でも違う。

傍らにあの子と似たような容姿の、黒髪黒衣の少女が居たが 彼  
女は不気味なことに、目元を手拭か何かで覆っていた。  
目が、見えないのだろうか

「尋問。妹を探しているのだが……こう、黒いメイド服で、眠そうな顔をした娘なんだが」

「……その子といい、貴女といい      まずは私の姿に驚くとかしないのかしら」

……？

「否定。別段、不自然な姿ではないと思う。むしろ、不自然なのは私たちのほうなのだから」

「いいえ、異常というべきじゃないかしら」  
小さいほうが喋った。

「だって、貴女もう、死んでいるじゃない」

ふと、振り返れば      意気消沈した妹が立ち尽くしていた。

まあ、あれだけ焰が上がっていたのだ、大暴れしたんだろう。  
「疲れた」と、一言。

死してくたびれていた、十字磔の娘の遺体　さて、いつ死んだのか、自分で気づいていたのか。

私の妹は、その辺が疎い。

死者と会話する、異能。いや、魂や残留思念、もっと言うなら、記録　記憶を読む。

この眠たそうな顔に隠された表情に気づくのは、最も身近に居る私でさえ難しい。

「阿呆。私たちの今晚の宿はどうする気なのだ」

「ルル姉え、我俣すぎるわ」

「……女子供をこんな簡単に野晒しにする町に泊まれ、と言うのか？」

と、妹は　磔にされた女を見据える。

もう一つ……妹の異能。

私は、この異能を知っているが、妹は多分、気づいていない。

死者の魂を、取り込む。

妹は、死者に縁があるという、

だが妹は、死者に引き寄せられている、

そして妹は、死者を喰らう……いや、こんな悪食、聞いたことが無い。

死者の感情を、直接自ら取り込む　この悪食。

悲しみや痛み、妬みや恨み、そして呪いと言ったものを、全て飲み込んでしまう。

……私にはそんな力はない。

ただ、死者は見える。死体はな  
音に關しては、もう一人の妹、レメラ  
女はそう言う娘なのだ。      レミイが聞き取れる。彼

妹      ルルダは、一滴、涙を零す。

いつも、一滴だけ      気づいたら、涙腺を止められるらしい。  
泣きたく、ないのだろう。

そんな妹を、強く抱きしめて

「移動。次の町では、暖かいベッドがあると信じよう」  
レミイの手を引いて、ルルの肩を抱いて、

私たちはまた、旅を続ける。

## 【喧嘩の話】ルール編

### 【喧嘩の話】ルール編

「はい、入国ありがとうございます。これで貴女は当コロシウムに参加する栄誉を得ました。おめでとう」

「……ころしあむ？」

「そうだよ　はっは、何も知らずノコノコやってきたようだね、お嬢ちゃん。

教えてやるよ。

この国はだな、そう言う国なんだよ。

ここは豊かで資源もあつて、何より平和　それにやちゃんとした理由があんに決まってるんだろ？

闘技場だよ！　コロシウム、殺し合い！　ノコノコやってくる馬鹿な旅人たちは、入国審査と同時に入国のためのテストを受けるのさ！　その成績によって、この国での待遇が決まるって算段よ！

まあ、女の子だから命までは取られやしねえだろう　存分に可愛がられるだろうけどな！　ヘッヘッヘ　」

「……だつてさ」

黒いエプロンドレスの娘が、寝ぼけ眼のまま入国審査員を指差すと、  
「静止。何をしたいかは理解したが、落ち着け」

「……」

黒い巫女服衣装の、凜とした娘がなだめ、その手に繋がれた黒衣の法衣をまとった少女が首を傾げます。

「即答。戦えば良いではないか。すなわち、この国では強者が法律なのだろう？　なあ、その毛むくじやら」

「け、毛むくじやらあ？」

巫女装束の娘に、入国審査員のおじさんが血管を浮き上がらせます。  
「おいおい、お嬢ちゃんたちよ？ 腕に覚えありって感じはするが  
よお この状況わかってんのか？」

「当然。理解している ようは私たちが強ければ問題ない、とい  
う事ではないのか？」

「はっ  
」

まるで小馬鹿にするように笑う入国審査官に

「結論。では三人で登録しよう。私はエッジ・オブ・アズリエル」

「ノワール・アズリエル」

「歌うアズリエル」

場は、沈黙した

1 私こと、エッジ・オブ・アズリエルの場合

まず、私について語っておくことがあるなら、一言。

私は、普通の人間だ。

自分の両親やら血縁に関してはわからないが 血を流せば流れる  
し、心臓は動いているし、別段、一つ下の妹のように翼を生やした  
り、物を生み出せたり、魔法を使うといったことは出来ない。

不可能だ。無理。と言うか、魔法って何？ な私だ。

どこぞの国の制度にある、学校と呼ばれる養育施設ですら学ぶ事柄  
すら、私は知らない。

ようは……私は、一般的にたとえるなら、バカなのだ。

この黒い巫女服とて、私たち三人を最初に匿ってくれた神殿のお下  
がりでしかない。

ただ、私は気に入っている。それだけだ。



それと、私は喋ることも苦手だ。  
いや、妹たち相手ならそれも大丈夫なのだが、……ようは、内気なのだ。

私は、シャイなのだよ。他人が駄目なのだ。

だからその、しゃべる際には結論だけさっさと纏めて、とっと内容を書いて……終わらせる。

と言うか、このバカ騒ぎもさっさと終わらせるつもりだった。

その、人気の中に晒されるのは……

存外、気持ちの悪いものだな。

そんな緊張した面持ちで、私は闘技場へ現れる。

……人というケダモノたちの歓声

私はふと思う、妹……ルルダは何故に、こつもあんな人間に憧れるのだろうか？

妹が普通ではないのは、よくわかっている。

人間なのか、あるいは魔物なのか……果ては、未知の生命体なのか。無学な私には悟れない。

……ただ、あの子はよく泣く。

無言のまま、泣く。無力だと叫ぶ自分に泣く。

あれだけの力を持ちながら、望むものを手に入れられず、守れず救いきれず。

ただ、無言のまま泣く。

意識が飛んでいた。

対戦相手は……ふむ、銃使いか。アナウンスが誇張の入った紹介を始めている。

銃器、飛び道具系で最強、当たると死ぬ。死ぬほど痛い。相手にしない。  
が妹の助言。

まだ年若い、……女の子じゃないか？

ショートカットに、短パン。帽子にガンベルト　この地方には見られない、おそらく東方、幻想卿と呼ばれる地方からの来訪者だろう。私も以前、似たような風体の男に出会って……妹が殺した。

その娘っ子は、私の名前　アズリエルの紹介に眉一つ動かさず、それどころか妹に匹敵する無表情で、私をただただ見据えていた。

好感。妹だけが、特別無感動というわけでもないものなのだな。

少女は一度相対してから、「負けを告げるなら、認めます」と抑揚無く告げてきた。

「このゲームに棄権は無いと聞いたが？」「はい、ですから　開始と同時に得物を捨てていただければ」

私の武器　それは背に背負った、大型の剣。

超大型剣、剣身は実に、私の身長を上回る。ゆえに、背中に斜めに背負うしかない。

「拒否。その提案は素敵だが、興味が無い」

「そうですか……」と少女

瞳が小さく緩み、「……これが、ゲームですか」と囁く。

「……ゲーム、でないと不味い」と、私。  
妹が本気になったら、誰も生き残らないぞ？

開始のドラだか何だかわからない、デツカイ音。  
フィールドは砂場で、私と少女は正面から……

……駄目じゃん。

「……降参しませんか？ 認めます」

少女はすでに、銃を正面から構えていて、私は所在なさに腕を下ろしていた……

剣を抜く……いや無理。でつかいんだもん。

障害物や何かあったら、その影に逃げ込むとかあったんだろうが、  
こう広範囲にただ広く、ルールなしの武器あり、何でもあり……  
うん、ルールが酷い。

少女は両手で、左手は添えるだけ？ ……綺麗な構えで、私を狙っている。

綺麗な構えということは、私がどこへ動こうと、その動きを見越して、銃身を動かし、私を撃てるということ。

小手先の動きなど、無意味。回避する方法は皆無、逃げる方法など絶無。

「銃は剣より強し……」えと、誰が言っていたんだっけ。教わったのは妹からだが。

「降参してくれると嬉しいんですが。弾を無駄に使わなくて済みます」

何か、本音っぽいことを言っている。

「拒否。」

あっさり返す私。あっさりだが、実際は焦っている。どうやって切り抜けよう、と。

悪いが、私は妹のような超人でも、一番下の妹みたいな異能の持ち主ではない。

弾の軌道が見えるとか、剣身で弾を弾き返すとか、やってみたいけど無理。

妹曰く、「衝撃が強くて、骨が折れたわ」……絶対に嫌だ。

私も、これでも女だ。怪我したくないし、痛い思いなど嫌だ嫌だ嫌だ。

「……ええっと、じゃあ 死なない程度に痛めつけます」

「質問。殺しはしないのか？」

「殺意、貴女から感じませんから。それに、貴女 本当は勝つても負けても、どっちでもいいんでしょう？」

……「……凶星。」

驚嘆。この少女、洞察力も鋭い。

確かに、別に私が勝たなくても、妹二人が……きっと綺麗ではないだろうけど、壮絶に勝ち進んで、この国はろくでもない最後を遂げるのが、目に浮かぶ。

正直、私などオプシオンに過ぎない。あれだ、料理に出てくる、前菜の隅っこにある、味の調節のための調味料程度だ。

私の中に、このまま降参するのもありかな？ と、小さな思いが生じるが……生じただけだ。

「だが、断る」

私は 断じた。

「どうしてです？」

「このキャステイナ 姉である上に、剣士である。銃が剣より強いという幻想を、切り捨てることに興味がわいた」

嘘、沸いてない。

ただ、むかついただけだ。

妹に似た小娘に、姉が負けてどうする？

「背は、向けない」

「では……痛い思いをしてください」  
引き金と同時に、【私は背を向けた】。

金属音

そう、私の背中には【身長を上回る巨大な剣】が背負われている。  
ダンスの要領で、軸足を敷いてターン。同時に、背中からベルトを  
はずし、大型剣を盾に 真後ろに立つ。

巨大剣……いくつ物板を何枚を貼り付けたような、重さと大きさに  
重点を置いただけの、……剣ともいえない代物。  
だから、今は盾だ。

少女は何を思ったか、拳銃の弾を全て捨て、別の弾丸に……アレか、  
鉄も貫くタイプの弾。  
もしくは、延焼系の弾丸……燃えるの嫌だ。

そう思った私は……剣を思いっきり、握り締め 一身に投げ捨て  
た

「……え？」

少女は、驚いて目を見開き 前に倒れこむように伏せた。

一度に【無数の剣】が、自分に向かって飛んできたら どうしよ  
うもなくなるだろう。  
頭を抱えて震えなかっただけ、正解だろう。

別に、大型剣が「無数の板を貼り付けて作ってある」といったわけ  
ではない。

その板の正体とは 単に、【剣】である。

十三本の剣　を、一本に、まるでパズルのように合わせて組み立てた、技巧気剣。それが私の得物である。

それを投げつけたさいに、分解させたのである。

……理屈は知らないが、その剣のいくつかが魔剣であって、途中稲妻とか焰を上げて、会場のどっかにぶっ飛んだのは無視する。妹たちの余波に比べたら、軽い軽い。

剣の柄、大型剣時の、柄の部分に当たる　始まりの一本【　】を手に、伏せた少女の首に添える。

「問答。降参しないか？　認める」

「……詰め、甘いと思いませんか？」

「無理。握り締めた拳銃で撃つ前に、お前を刎ねる技能はある。私には、それをする覚悟がある」

肩口が動く前に、言葉で制する。

「追加、添える前に腕を踏みつけても良かったのだが、先に降伏勧告をしてくれたのはお前だ。それを鑑みて、こう処置をとった。

私は、痛みなど与えない。私は単なる人間なのでね。痛みを与えるなんて余裕は、もってはいない」

「……降参」

拳銃を手放したところで、少女を襟首から吊るし上げ……他の火気、武器類を確認したら、そのまま退場した。

会場が、なんだか煩かったが　剣を振るったら、おとなしくなった。

……便利な剣でな？　十三本、すぐに揃って元の大型剣に戻ってくるんだ。

無論、雷とか焰とか撒き散らしてな

【Asrielワンポイントターン】

「ねえ、ルル姉え」「何よ、レミイ？」

「キヤス姉えのあの剣、一体何なのよ」

「あれ？……私何人か、魔剣使いを倒したのは知ってるわよね」

「……それ、全部溶かしてつくったの？」

「違うわよ。でも、参考にはしたわね　でも、私も詳しくは記憶に無いの」

「へ？」

「造ったのは私。あのギミック……嵌め込み、変形、合体分離機能は私の案じゃないわね」

「姉さんが作ったのに、案は姉さんじゃない……どういうこと？」

「ようするに、私の記憶の中に、そう言う武器があったのよ。そう言えば、可変系刃物があつたわね、暗器系の。あれの変化版かしら」

「……で、変形分離ギミックは別案として、あの剣自体は何なのよ」

「伝説の武器、魔剣、聖剣を使って、あの変形奇剣を造ってみました。錬金術参照で」

「……姉さんの設定って、相変わらず無茶苦茶ね」

「無茶も無茶よ……自分だって性能の限界を知らないから、どうしたらいいか、わかってないんだもん。結構これ、不安なのよ？」

「……あっそう」

「あの、雷や焰は魔法剣のオードソックスね。でも、離れて舞い戻ってくるシステムは、カンショウ・バクヤの夫婦刀の性能もあるのかも」

「色んな聖剣、魔剣の能力を折り合わせた、むちゃくちゃな剣なのね」

「でも、欠点があつてね……そんな美点ばかりそう都合よく積み合わさってくれるわけじゃない」

「何があるの？ 弱点　」

「すごく重いの」

「……姉さん、背負ってるわよね、いつも。それに十三本も、でし

よう?」

「その辺は……小刀とか短剣でも、重いものは重いし　それだけじゃなくってね、あのさ　十三本もの剣のさ、性能ってそうそう理解できると思う?」

「へ?　……嗚呼、一挙に十三本、もですからねえ」

「それだけじゃなしに、組み立て方　一種のパズル要素もあつて、嵌め方や外し方で間違つたり、別属性同士の剣を合わせたら、暴発しちゃうのよ。あの、剣の投擲のさい、無数の剣がつてあつたけど、実際、娘っ子の腕力で、剣が飛ぶわけ無いでしょう?」

「……じゃあ、アレ　」

「実は、エクスカリバーとグラムが反作用起こして、吹っ飛んでたの　まあ、爆発の原理だから、投手への爆風は防げる仕組みになつてるっぽいけど」

「っぽいって何!」

「姉さん、怪我してるかも」

「ちょ!　姉さん、ねえ~~~~さああああ!!」

「あ、　待ってよ~~~~!」

## 2　歌うアズリエルのステージ

どうしよ……

どうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよ  
どうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよ  
どうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよ  
どうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよどうしよ

……

私、喧嘩なんかしたことないんだよ?

デビュー戦だよ?　デビュー戦　心臓バクバクウ~!



……馬鹿言ってる場合じゃないわよレメラ。

これ非常に重大に危険に波乱万丈にシリアスにミステリーいわ。

えっと、手の平に文字を書いて

人、魔、神、化、天、姉　よしっ！

「レミイ、何一人でぶつぶつそわそわごわごわしているの」

「鈍感。緊張しているのだよ」

「それはわかるけど、姉さん……」

「嗚呼。レム　おまじないを教えてやろう」  
今しました。

「何、簡単なひとことだ」

あ、キヤス姉の枕文字が消えた。……どんなまじないだろう？

「やられるまえに、やれ」

闘技場へ、ぽいっ　と放り出される妹な私。

……

……

……

三点リーダー三連続……

対戦相手、ならずものつぽいおじさん達、数人。

……あり？

「忘言。これ、別に1対1とはルールにないからな」

『ちょ！　こら、そこ糞姉貴どもまたんかい！』

「失望。まあ、はしたない。そんな汚らしい娘に育てた覚えはありませんことよ」

『このままじゃ本当に私穢されちゃうわよ！』

「ちょ！ 姉さん、駄目よ！ まだレミイは子供なんだから！ 私、場合によっちゃ、マジで出るわよ！」

『ルル姉え、大好き！ 愛してるから今この場に来い！』

「必然。だいたい、最近レムとてストレスを発散させていないではないか」

『へ』『え』？

「思う存分歌うと良い」

変なデッカイ鐘？ の音と共に、おじさんたちが散開して、私を回り囲む。

……どうしよあ？（涙目

「不気味な小娘だな」

「身包みはいじまいな」

「キヤス姉、私出る！」

「虚脱。なんで山賊紛いはいつも、下ネタばかりなのだ。なあ、下ネタの女王よ、教えておくれ」

「誰が下ネタクイーンですか！ 男は皆、狼なのよ、気をつけなさい！」

……年頃になったなら、慎みなさい

……は、ふう

「こ、この小娘、あくびなんか掻きやがって」

「ほ、本当に、このガキ、アズリエルなのかよ？」

そう言えば、私 【黒衣】だったんだ。

生まれたときから、自我が芽生えたときから着込んでいるこの衣装

この衣服の下には、  
この、黒帯の奥にある瞳を

晒すのは、久しぶりだなあ。

身を翻して、私は衣装を剥いだ。  
実は、取り方は練習していた。

黒衣の下にある衣装  
真っ白なプリンセスドレス、ただ広いフレアスカートがふわりとひ  
ろがり、

黒衣の下に封じられた瞳は、蒼く、蒼穹と深海を混ぜ合わせたよう  
な、深く済んだ

その、私の容姿を細かく描写したら、限が無いので  
要するに、私は

絶世の美少女、って言う存在らしい。

まわりや、会場、客席まで 一斉に「ほお」とか賞賛のため息が  
あちこちで、響く。

響く 聞こえる、知覚できる。

【音】……に特化した異能。が、私らしい。

まあ、この喧騒騒ぎで、だから何だって話なんだけど……  
ええーっとお……

「……レメラ・アイオンス。1番……えっと、【土管の上でリサイタル広げるガキ大将！】歌います！」  
自棄になった。

世界も、自棄になった。

### 【剣と黒のターン】

「……ねえ、姉さん」

「微笑。なんだい、可愛い妹？」

「……レミイって、あんなに化物だった？」

「叱責。」

「いたあっ！」

「違う、レミイは私たちの愛らしい妹だ」

「うう、そうでした。ごめんなさい」

「回想。以前から、よく死者に会うお前だったが、逆にレムは死者の音から、世界の音まで、……いや【全ての音】が聞こえる存在だったのだよ」

「知っているわ。その【音】を言の葉に乗せて操る、瞬間催眠、洗脳　いや、【喋る言葉】が完全な洗脳になってしまっ、難儀な能力」

「不思議。救いがあるなら、私たち姉妹には通じない、と言うルルね」

「で、姉さん」

と、ルルダがもはや砂場ではなく、巨大な混沌の坩堝となった、闘技場を見渡した。

「二番！ 【父さんにもぶたれたこと無いのに！ 根暗少年が口ボツトに乗って戦う歌！】」

さきほどまで謎の青猫生命体が跋扈していたり、「ノヴィタの癖にいゝ」と暴れまわる巨大トロールが駆け回ったり、次の曲では「立ち上がれゝ」と歌詞改編された曲に合わせて、地面から巨大ゴーレム、ご丁寧に白いアイツとか、巨大な木馬が暴れまわったり……

「……あれ、ゴーレム・サーヴァントね。オリジナリティ溢れてるわ」

「関心。魔法か？」

「多分。創造系の魔術だと思うけど、手順とかそんなの問答無用？ アレ、弱点ないじゃない」

「……瞬閃！」

「へ？」

「ひらめき」

「姉さん、枕文字のネタ無くなって来たんだったら、普通に喋ったら？ 変なキャラ作りはいらわないわ」

「お前だって、普通の娘を装っているではないか」

「……、素の姉さんを真似ているつもりよ」

「……頬赤。」

で、だ 私の考察だが、レメラは多分、精霊や妖精、幽霊や神霊といった類にも、効果を及ぼせるのではないか？」

「あつ」

「視認。見えるか？」

「……解らないけど、全部魔術から精霊術までまぜっこぜで……こんな私でもできないわよ。でも、多分そうね」

「回想。死者の声を以前、レムに感知してもらったのだが 十中八九、間違いない。あの子は魔法の歌姫なのだよ」

「可愛らしい歌姫ね」

「同感。最凶の歌姫だ」

「三番【地獄からやってきた某皇帝三世さんのS A T S U G A  
Iの歌】！」

『そのデスメタルロックは、歌詞が駄目えええええ！』

その某三世さんの曲目には、「殺す」とか「父ちゃん掘る」とか、  
卑猥な歌詞が多いのです。

ここで、「」考。

レメラちゃんの歌詞は「洗脳」の効果を持っているので 聞いた  
人は皆、そのとおりに行動しちゃうわけです……

「……マジヤヴエ」

ライブ終了後 会場が、崩壊していました。

残念ながら、一部歌詞を聴いた対戦相手さんご一行は、命こそあれ  
ど、奇声を上げるトルルや、蒼いケットシーとか、連峰の巨大なゴ  
ーレムたちにフルボッコ。

さらには、会場を見ていた皆様のほとんどが、耳から血を流して卒  
倒。

「はっふう、スツキリ」

「……嘆息。久々にレムの声を聞いたと思ったら……」

「ええ、なんて」

『なんて綺麗な歌声なのかしら』

姉馬鹿が闘技場に残された。

### 3 アズリエルのターン

……さて、私の出番なのだが。

闘技場……ゴーレムの素材のため、会場ボコボコ。

客、美声のため全員卒倒。

闘技戦士　やはり歌声の余波で全滅……

その、レメラの戦闘後、なんだが……

「絶句。だが次善。レメラのお陰でルルが暴れずに済んだ」

「えへへ」

「喋った途端にキャラ変わるわね。レミィ」

「だって、自分の声で喋れるなんて、素敵じゃない」

「終焉。では、さつさと次の街へ行くか」

「そうね　ってか、私何もしてないんだって。私の鬱屈はどうしたらいいのよ！」

「馬鹿。一々あの程度で怒っていては限が無いだろうが」

「馬鹿ね、姉さん。姉さん自身がよく言っているじゃない、ホラ

男は狼なのよ、気をつけなさい」　って。

殿方の下ネタなんて、軽いスキンシップみたいなものでしょう？」

「何その大人の女のような台詞は！　アンタ、本当に一番下の妹なの！」

「驚愕！　そんな妹に手を出す連中は　消す」

「無論よ、姉さん！　と言うか、レミィ、そんな台詞言っちゃいけません！」

「嫌よ、普段喋れないんだから。それに冗談（に）しとかないと、姉

さんたちが危ないわ」よ」

「……」「……」

「うふふ、姉さんたち、大好き」

「……うう、この笑顔、卑怯だ」

「同感。この妹、悪女になれる」

「……で、出番が無いのはさすがにしゃくだから、【後始末】だけしていくわ」

~~~~~

「すんげえなあヲイ」

俺はそれを何と言うか、絶句して眺めていた。  
クレーターが広がっていた。

話には聞いていたが、さすがは【俺の妹】と言うか、何と言うか……

「すごいですね、兄さん」

「嗚呼、大自然の猛威の過ぎ去った後の、何ともいえない遺憾のよ  
うな」

「人間の文明なんて、結局一瞬で滅びてしまうほど、矮小なんですよ  
うね」

「違うわよ。上り行く階段は険しく、一段一段だけど、降りる際には  
蹴り落とされれば一瞬って話よ」

と、ウチの妹＋幼女。

「誰が幼女か」

黒髪黒瞳、幼い体躯と漆黒のワンピース。

まだ小等学校を出るか間際と言う年齢層に見えて、その実、大人び



過ぎていくから実年齢不詳。

つつか、俺も知らない。

そして我が護衛対象にして依頼人にして愛すべき友人にして

【物語】

「妹、ですか……」

とは、黒髪碧眼の白い衣装を纏った、可愛らしい女の子。

こちらは16を回ったのか　ますます美人になっちゃって、親友にして彼女の実の兄の心配性も、しみじみ理解できてきた。

もつとも、その妹を連れ出した俺が何を言っているんだか、って話だが。

【主人公】

「で、兄さん？　コレは一体何をどうしたんですか？」

「ん？　単に破壊しただけだろう？　面倒くさいからって、一発で」「い、一発う？」

「あんな、専門家でもなんでもない俺でもわかるぜ。」

こういう波紋状のクレーターってのは、隕石が落ちたか大爆発が起こったか　前者がありえないなら、後者だな」

「そう、隕石が落ちたのね」

「リナツち　人為的に隕石を……」

「禁断魔法、メテオスーム」

「何人くらい術者が必要ですか？」

「一般魔術師なら百人かな」

「某究極幻想ってゲームだったら四人全員メテオ放ってたわ」

「いまだきスーファミで遊んでる小学生ってのも末恐ろしい話だな」

「誰が小学生か！　あとスーファミじゃなくて、パソコンで遊べるソフトです」

「どっちにしろ、幻想世界にはあるまじき会話だよな」

そう言っているのに、小型のパソコン……俺が買ってきてあげた  
でそのゲームを立ち上げようとする。

妹はクレーターの淵を踊るようにふらふらと、蝶と言いか水鳥と言  
うか何と言いか 優雅にふらついている。なんか表現おかしいな。

まあ、顔の造りといい立ち居姿が可愛いからな、妹は。 兄馬鹿で  
す。事実。

「で、兄さん これは誰が、何を、どうやって 兄さんが言う  
なら、爆破させたんですか？

魔法ですか？ 爆弾ですか？ それとも何か別の方法で？」

「ん？ ……さあな 目的は知らねえ。

使ったのは、【魔法】だろうな 使った技は【錬金術】」

「……これだけの質量を、錬金術で？」

「嗚呼、【無機物】だけを一気に空気 無に換えちまったんだ。  
ちよっと仕組み知ってれば、実は簡単だった」

「それでも魔力とか膨大でしょう？」

「と思うでしょ？ ……この魔術式の連鎖を知ってたら、結構  
少なく使えたり」

「人生幾つ分？」

「三人生分」

「……」

しらつとした目で見つめてくる二人……

「三人ぶつ殺したら」

「いや、ぶつ殺したってできないから」

「この世界のルールでは、死者の魂から魔力を吸収できると言う病  
があるそうじゃないですか。

この殺伐とした世界なら、人間三人分なんて 簡単でしょうね」  
自分で言いながらへこみはじめる妹、こと姫っち 可愛いなあ。

「シスコン」

「呼んだかい？」

「はい？ 兄さんにリナ、何か言いました？」

「別に」「じえくんじえん」

白きるリナ&Me。

クレーター……いや、実際は【陥没】した大地の淵をまたふらふらしている。

「どっちにしても、切ない、ですね」

「再生させましょうか？ 多分、人間一人も再生できないけど」

「へ？」

「術者は実に可愛い性格してるよ なんで【無機物だけ】空気に変えちまったかって話」

「ああ、その錬金術師」

ヒトを殺したくなかったんですね？

「でも、物は壊したかったと まるで、【静兄さん】みたいな性格ですね」

「……嗚呼」

俺は、感慨深く頷いた。きょんとした妹が可愛かった

〳〵オマケ 脱出編〳〵

「このお馬鹿！ 国を丸ごと錬金変換してんのよ！」

「だあって！ こんな物騒な国じゃないじゃない！ 銃器撲滅、刀

剣武器破壊！ 銃刀法違反！」

現在、三姉妹全力疾走中

瓦礫の山が次々落ちてきて、アズリエル姉妹に降り注ぐ と思っ

たら、小さく光って消失。

【錬金術】      しかも手順とか方法といったものを一切無視した、異能。

「さりげにキャス姉、キャラクター剥がれてる！」

「叱責！ 今はそれどころではない！」

地盤が緩んで、ものすごい地鳴りが響いています。すでにコロシアムは原形をとどめるどころか、その大半が光に転じて消滅。

そう、ただ【消える】      頑強な鉄壁や柱が、次々に塵芥を撒き散らして消え去り  
床が、沈んでいる。

「まあ、人間って嫌い！ 土地が無くなったら地下まで侵食しやがつて！ ちゃんとお日様浴びて生きなさいよ！」

「日陰者人生の私たちが言うのもなんだがな！」

「姉さんたち、少しうるさい」

『だまらっしゃい！』

「乗りますか？」

と、廊下を駆け抜けた、外で

「君は……」

「降参させてもらったお礼、ですかね」

一台のバイクにのった、あの銃使いの女の子が、ただ訝しげに、しかしそう伝えた。

「この、なんか魔法      ですか。妹さんを中心に発生しているように伺えますが」

「あう！ 今解除するする！ バイク解体はこっちもごめんよ！」  
「よかった」

…… 食えない子、と思ったのは戦ったキャステイナ。  
別にルルダを中心に、崩壊が広がっているのではない。  
術場 すなわちコロシウムから中心に、拡大している。

ついでに発信源のルルダも、落ちてくる瓦礫相手だけではなく、ほぼ障害物に対して、無差別に【分解】していた。  
変に凝った名前を付けずに言うなら、【バニッシュ】とも言っべきか。

その拡大速度が、自分のバイクで適わないと踏んで、おそらく三姉妹を待っていたのだらう。

「……」  
「……」  
「……」  
「……どうでしょう？」

バイクは、二人乗りだった。ぶつちやけ、レメラをキャステイナがルルダが抱えれば問題ないのだが。

「問題ない、私が飛ぶ」  
と、ルルダは言う。 背中に翼を生やした。

脱出道中。

「確かに、噂どりのアズリエル。いえ、アズリエル三姉妹、ですか」

と、銃使いの少女。

「肯定。主に噂の伝承になっているのは、あの目立ちまくりなんだが」

『……ルル姉え、天然だから』

「でも、噂では　彼女は、蝶の翅のはずでしたよね？」

なんで、鳥の翼なんですか？

くくく

静

「そりゃそうさ、

蝶の翅は、惑わす幻惑の　　蠱惑の象徴。

だが、姉妹の真実にゃ、単なる夢見がちな逃避少女ってことさ」

へえ、　とぼく。

ぼくは旅人、こちらは先ほど出会って野営を共にしている男性。

傍らには少女が男性の膝を枕に眠っており、その背にもまた別の少女がしなだれかかる様に眠っている。

どうも三兄妹らしい。真実かはわからない。

「だが、その幻想少女、面白いな　　軽い分析で簡単にわかる」  
何が？　とぼく。

「翼つてのはさ、一枚じゃ飛べないだろう？　【一対】になって、初めて空を飛べるといわけさ」

「空を飛ぶ？　……飛んでどうするの？」

「空を飛ぶ、と言うのは暗喩さ。一つは逃避、もう一つ綺麗な意味では夢、だろうな。まあ、どっちも表裏一体なんだけどさ」

そういうと、男は焚き火に翳していたカップを手に、軽く飲み息を整える。

「その少女には目的がある。そのために翼を広げて、アピールしているのさ。」

『ワタシはここだよ、早く迎えにきてよ』って　それが幻惑の翼となり、人々の噂になっっているのさ。

別の噂では、生き別れた兄を探しているとか言ってたな  
それは初耳です、とぼく。

「……内緒情報も一つ。その兄貴は、喧嘩が滅法強い」

「まるで、知っているような素振りですね」

「嗚呼、だって君の目の前にいるじゃないか」

そう言つて、眠そんな顔をしたこの男は、お先にとだけ残して、眠りについてしまった。

物騒な人間に関わってしまったな、とぼく。

さっさとおさらばしたいところだけど、ぼくも眠いし  
彼らより先に、早起きできることを願おう。

叩き起こされた。

妹さんのほうに。

そこで、僕らは別れた。

僕は彼らが来たほうへ、彼らは僕が来たほうへ

物語は流れていく……

## 【剣の娘の話】

### 【剣の娘の話】

重い静寂を引き裂く。

さて、この静寂とは単にこの周りの状況を表している。

陽光の寝静まった宵闇の刻、それでいて闇夜に相応しき音の調べ

虫の音、獣の微かな呼吸、木々のざわめき

それらが、一瞬にして消え去った。と、最初の一文は表現したいわけだ。

それを見据えているのは私、レメラ・アイオンス・アズリエル。

アズリエル三姉妹の、三女にして、歌姫。だが今回は私の出番はない。

ゆえに語り手くらいしか役割がないので、勝手に勤めさせていただく。

今回の主役は、キャステイナ・アズリエル。キャス姉である。

彼女の振るった巨大な剣は、風を唸らせ、木々に震撼をあたえ、夜を物語りの舞台へと彩っていく。

共演は 名も無き大型剣を振るう、麗しき少女。

この物語の元凶にして、発端

では、物語る前に、なぜこの二人が月夜に舞い踊ることとなったのか、

私は回想に入ろう。



鳴呼、真ん中

キャラバン

提案者はご想像にお任せします。ちゃんとお墓は作りましたので悪しからず。

馬鹿姉……ルルダ・アズリエルはその一枚一枚をしげしげと眺めながら、ある一枚に視線を細めた。

一番上の姉が揶揄して聞くが、残念ながら馬鹿姉が目留めたのは、手書きで描かれた少女の立ち姿。

「不満、お前が示した興味は、何かしら意味がある。退屈、何か話せ」

こめかみをひくつかせ、ルルダはその姿絵の少女を目線で促すと、姉さんと同じ、大剣使いよ」

珍しく、姉さんが枕詞を忘れた。

40

「なんとなく、違和感があったから」

「ほお、どんなことだ？ まあ、私は他人のことは言えぬが、淑女が剣、しかも大型剣を持つている時点で違和感丸出しだと思うが」

「……キヤス姉、丁寧語崩壊してる」

「ここは私が突っ込んだ。というか、枕詞使う気もなくなってる？」

「そう、なにより私が見た瞬間、キヤス姉も興味を持ったじゃない。同じ大剣使いとして」

「……」

沈黙は肯定なり。

「でもね、この絵師が彼女の姿を見て、この姿を描いたのだとしたら……」

「……だとしたら、何なの？ ルル姉え」

これも私が聞いた。キヤス姉は看破されたのか、張り紙を凝視している。

「この眼、なんて物悲しいんだろう。って」

……馬鹿か、この姉は。

それが、正直な私の感想だった。

そのチラシはバウンスハンター、ようは賞金首の張り紙であって、その少女は賞金首だってことで、

……キヤス姉が興味本位で乗り出してしまっ

今夜に至る。

気が早いし、勘弁してよね。

この馬鹿姉ども

「謝罪。つき合わせてすまん」

「……」

無言な私だが、首は横に振る。別に構わない。やりたいことがあるだけマシだ。

私は、結局この二人に付き合うのが大好きなのだ。

口には出さないけど。

だけど、ここにその片割れはいない。調べたいことがあると、チラシを眺めてるキャス姉にそう告げて、街中に消えてしまった。

男漁りでもしているのだろうか、あの馬鹿姉。どうも血縁の兄探しに夢中で、そんなぼつとした街にいてもねえのに、あちこち探索する放蕩癖がある。

かといって、私は人間不信だし（諸事情って奴よ）。キャス姉はこんな調子だから、人様との対応には苦労する。

…… ようは、変人なのよ、私たち三姉妹は。

でも、夜中の散歩って言うのも悪くないわね。

なんて言うのかしら、ロマンティックって言うの？

私ったらなんてロマンティック

「奇妙。ニタニタしながらひょんひょん飛び跳ねるとは……月酔いか？」

「いいじゃない！ こんな雰囲気はめっちゃロマンティックなのよ」

「訂正。どちらかというなら、ルナティック月夜だと思っただがな」

今は二人つきりだ。喋ることに問題は無い。

町外れの森　少し調べた昔話では、この先は黄泉路に繋がっていて、いろんな魔物や妖怪が潜んでいるという伝説がある。もっとも、近代化の進んでいる今、その伝説も廃れてきてもいるが、その伝説を立証する程度の、厄介な問題も潜んでいる。

彼女　【剣の姫】もその一人。

仮に今は、そのバウンスハント対象を【剣の姫】と呼ぼう。

彼女は、ようは狂戦士<sup>ベルセルク</sup>なのだ。

そう、目の前で木々をなぎ倒しながら　旅人の屍を……あれ？

「立証。やはり、今宵はルナティック」

そう言い放って、うちの賢い姉は　それこそ、月狂な微笑<sup>ルナティック</sup>を湛えて、剣を下ろす。

虚ろな視線、左右には優雅な巻き毛をたらし、その薄紅色の髪が別の紅でさらに彩られている。そしてなにより、まだ幼すぎる。年齢はへたをしたら、私より下かもしれない。ちなみに私は15くらいだと思ってる。

簡素な皮鎧、だけど大型剣には不釣り合いな皮装備だけど、彼女これらの華奢ならば、この軽装のほう動きやすいのかもしれない。

無骨な、大型剣。大型剣は基本、でかい鉄の塊で相手を叩き割る。ようは斧と似たようなものだと思うてる。それを剣状にして、さらにでかくして、強さをアピールする程度。

普通はこんな武器、使いこなせる人間は、男性でも中々いない。

ただ、相手にするなら、普通に怖い。

一撃を耐え切れる人間は、まずいない。真上から振り下ろされる一撃だけで、おそらく死ねる。

先にも述べたが、鉄の塊だ。ようは剛速球の鉄球を受け取るようなもの。それも手じゃなくて全身で。

姉さん、大丈夫　　ッてヲイ！

心配してた私をよそに、もう突貫して剣を混じり合わせ　　うわあ

ああああ！　　なんか、ゴキイっていった！

なんかルル姉が使う剣の音とぜんぜん違う！

ちよ、骨骨骨！　　骨逝ってない？

って、片手で振るった！　　よく手元に戻せるわね、お互いいいいい！

怖い怖い怖い！　　なんであんなギリギリで避けるのよ。顔に切り傷

……あとでルル姉につてぎやあああああ！　　お姉ちゃんお腹お腹お腹あああああ！　　斬られてる斬られて……いやあああああ！！

（中略）

……

……

いや、姉さんの戦闘を間近で見たのは初めてではないんだけど  
いや、初めてじゃないからこそ、半端ねえのです。

だって、当たったら死ねるレベルの剣閃を、本当紙一重で避ける姉  
さんと【剣の姫】。

お腹だって、突きを掠っただけであれだけ切り裂かれてるんだから、  
たまったもんじゃねえのです。

……？

いま、微かに、誰か笑わなかった？

とにかくそんな姉さんを幾ばく眺めていたのだろう。  
徐々に劣勢が見えてきた。

……姉さんが遅れてきていた。

何を思うのか、時折眉根を寄せては、苦しげに大型剣を避ける。

そして、一番怖い、【受け】。

姉さんは大型剣を横這いに両手で構え、大型剣の一閃を受け止め始めた。

姉さんの大型剣は、一種の技巧剣で、ギミックブレード中身は結構複雑だ。いくつかの魔法剣もアレンジされて組み込まれている。

多少の衝撃では壊れないだろうが、相手は多少ではない衝撃を叩き込んでくる。

それにおかしいのは、姉さんが剣を一度も分解していないということ。

あの大型剣は、ルル姉が仕留めて来た魔法剣士たちの魔法剣を参考にアレンジされ、加工、改変された複数の魔術をもつ、魔法剣。最大の特徴は、使い辛いが一度に十三の魔法剣を起動、発動し、繰り出せるところにあるし、姉さんならそれができる。

それを一切使っていないのは、剣士の誇りという奴なのか。

そんなんで私をハラハラさせんじゃねえ。

【剣の姫】は虚ろな、しかし何かに怯えるような形相で  
姉さんを確実に追い詰めていく。

重々しく、しかし確実に  
姉さんの命を刈り取ろうと

私の喉から、悲鳴に似た『言の葉』が押し迫ったそのとき

「ん、遅い、妹」

「ええ、少し遅れたわ、あねぎみ姉君」

「……へ？」

言の葉は掠った。

闇夜の霞のごとき、我が姉ルルダが登場し、【剣の姫】を一瞬にして、不気味なオブジェに作り変えてしまった。

え？ …… 詳しく書くところ飯食べられないわよ？

…… まあ、ようは【剣の姫】の全身が、ハリネズミみたいに無数の剣が突き刺さった状態で

描写は避ける。というか眺める前に、その形が崩れ去った。

…… あ、あつけない って、へ？ え？

「幻影」

戸惑う私にキヤス姉が抑揚無く告げる

「アリエス有得無。あんな小柄で、私と同等に大型剣を捌くなど…… 物理的に不可」

そっついながら、キヤス姉は全身を組まなく筋伸ばし…… 切り裂かれた傷口をルル姉が手を添えて塞ぐ。

お得意の錬金術、なのだろう。無機質だけではなく、有機物まで再生させられるというのが姉さんの強みらしい。

奇怪な鉄塊オブジェが、霧散し そこには一本の錆びた大型剣が

取り残され

「裏は取った。この奥だ 【剣の姫君】は」  
ルルダ姉さんがそう告げて、キヤス姉は再び大型剣を手にし、私はただ二人に連れられるまま

やがて、深い樹木を抜けて、夜だというのに明るい、とある場所に出た。

深い深い茨、樹木と言う空に覆われているのに、飛び交う夜光蝶や、夜光花によってまるで神殿のように彩られた場所

「イラストレーターに会ってきた」

「疑問、あの張り紙の絵師か？」

頷くルル姉。「どこで模写したか聞いたら、出現地域の森でうたた寝していたのを目撃したんですって。結構出回っていた話らしいわ。戯言扱いされてたけどね」

そして、ルル姉はその夜光地帯の奥に 佇む巨大な樹木を見据え

「まるで普通のように眠っていて、でもそこに別の戦士が訪れて、少女と戦い、そして相手を殺す姿まで見届けたんですって 逃げ帰った彼は、その姿をそのまま絵に起こした。

でも、その表情がどうしてそうなったかは、こう答えたわ。まるで普通の少女のようで、あどけなく、でも戦っている姿は恐怖にゆがみ、戦い終えた後は悲しみに沈んでた……」

「肯定。とてもベルセルクとは思えん」

「昔々あるところに、とても美しく武芸の強いお姫さまがおりまし



た」

突然、ルル姉が何かを語りだし　私は耳を聞きたてた。

「でも、その美しさに嫉妬した魔女は、策謀を立て、姫様を永遠の戦いに陥れるのろいをかけてしまいましたと」

ザンッ

「さ」

ルル姉の何かの力が、樹木を立てに切り裂き　その中から、あの薄紅色の髪をした少女が、生まれたままの姿で堕ちてそのままキヤス姉が彼女を抱きかかえる。

「夢魔、現実には干渉するタイプの呪い。すべてはこの剣姫の悪夢」

「理解。すなわち　これは死者の夢か」

キヤス姉に抱かれた娘からは、生者の色は無く　夢見心地とは、あまりにも違い……

「そう、でも姉さん　夢には終わりがあつたものよ。ねえ？　お姫様」

と、ルル姉さんが剣の姫に自分の黒衣をまとわすと、一瞬で先ほどの衣装に形を変え

「悪夢は終わり　さ、最後の夢を……私が知る限り、姉さんは最高の剣士。いかが？」

耳元で囁く姉さん、そして　死者の瞳が一度だけ開かれる。

「……だ、れ？」

「悪い魔女はもういませんよ。あとは、アナタが今の自分を受け入れること」

いつの間にか、キヤス姉が大型剣を構え　ルル姉の手にはあの錆びた大型剣が、一瞬にして鈍色を取り戻した剣に変わり

「大昔の武芸者、か　我が妹ながらも味なことを」

「別に……」

と、ルルダ姉さんはそっぽを向いて　割れた樹木に手を添え、

虚ろな姫君は、夢の中で戦っていた姉を認めたのか　大型剣を構えた。

姫の、最後の戦いが始まり

結論から言うと、それで終わった。

だって、ガチャガチャ戦っている姿に、あまり感慨も関心もなかったし

ただそうね、剣の姫さま……少し笑顔だったかな。

私がこのお話でしめるなら、そう言う事しかできない

## 【剣の娘の話】（後書き）

すいません、久々の更新すぎまして。

何か夏休みのホラー企画もブツチしてしまっ…（家庭の事情

ここ最近、まったくといって良いほど、読むのも書くのも小説手付かずで……

自分好みのファンタジーがだんだんと乏しくなってきたといいいますか。

現在は西尾維新が主成分となっております。駄文となりましたあ

O T L

今回は、小説ファイルに残ってたアズリエルを、ふらっと手につけたのでうp……嗚呼、幻想郷入りシリーズもニコニコに上げてみないなんて野望もあるんですけど……無理だろうなあ

うだうだ後書きでした お目汚し失礼m（――）m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2136f/>

---

Asriel Monolog

2010年10月28日06時40分発行